英語の大母音推移について*
（On the English Great Vowel Shift）

太　田　　聡

1．はじめに

英語は、綴りと発音が一致しないと批判されることがよくある。発音は、どの言語でも、何百年と経つうちに徐々に変化するものであるが、綴りは、一旦固定されると、発音ほどには変わらない。そのため、発音と綴り字の間に乖離が生じるわけである。本稿では、大母音推移（Great Vowel Shift, GVS）と呼ばれる英語史上最もスケールの大きな音変化を主に取り上げて、いつ、どのように起こったのかを概観しながら、それが起こった理由について、私見を一部述べることにする。

1.1. 英語の3〜4区分

英語を歴史的に論じる場合、以下の（1）のように、3〜4つに区分して論じることが一般的である。[1]

（1）古英語（Old English, OE): 700 – 1100年
　　中英語（Middle English, ME): 1100 – 1500年
　　近代英語（Modern English, ModE): 1500 – 1900年
　　現代英語（Present-day English, PE): 1900年 –

これらの名称は、古代の英語だから「古英語」、中世の英語だから「中英語」、近代の英語だから「近代英語」といった具合に歴史の時代区分に合わせてつけられているわけではない。英語を、発音、屈折変化――性、数、格、時制などによって語形が変わること――、語順などの言語特徴の観点から捉えた場合、1100年ごろと1500年ごろに大きく変化しているので、1100年より前の英語を古英語、1100年から1500年までの英語を中英語、それ以降の英語を近代英語、さらに、20世紀以降の英語を現代英語と呼ぶ。そして、各

時期の英語の特徴を大雑把にまとめてみると、次のようになる。

(2) OE: 屈折変化が豊かであった。そのため、語順は比較的自由であった。
ME: 屈折変化が減少し、語順が固定化されていった。
ModE: } GVS が起こる。
(Early ModE)
一般動詞が助動詞のように振る舞う。
PE: 動詞と助動詞は振る舞いが異なる。

OE では、名詞や動詞の語尾変化が豊かであったのみならず、形容詞や冠詞にも性・数・格による語形変化が見られた。そのため、例えば、「そのよい石が」という主語になる名詞句と、「そのよい石を」という直接目的語になる名詞句を OE で表せば、それぞれ、se god stan, þone godne stan（強変化男性名詞の stan “stone” はたまたま主格形と対格形が同じである）となる。PE では、どちらも the good stone なので、主語ならば動詞の前に、目的語ならば動詞の後に、といった具合に語順に頼って意味を判断するしかない。しかし、古英語では、屈折変化が豊かであったので、動詞の前か後かといった順序に依らずに、主語か目的語かが分かったわけである。

9世紀後半になると、デーン人（Dane）――いわゆるヴァイキング（Viking）――たちの侵入が激しくなり、ブリテン島の先住民であったケルト系のブリトン人（Briton）たちを追いやったアングロ・サクソン人（Anglo-Saxon）たちの国々が、今度は、デーン人たちに占領されてしまいそうになった。ところが、それをウェセックス国（Wessex）のアルフレッド大王（Alfred the Great）が食い止め、デーン人との間に休戦協定を結んだ。そして、今で言うところのイングランドの東北部（この地域をデーンロー（Danelaw）と呼ぶ）にデーン人たちが住み、西南側にはアングロ・サクソン人たちが住み、一つの島の中で（小競り合いはあっても）平和共存する形が、その後、百年以上続くことになる。ところで、デーン人たちの言語（古ノルド語（Old Norse, ON））は、OE と同じくゲルマン語（Germanic）から派生したもので、二つはとても近い関係にあった。そのため、２言語の混交によって、ピジン化（pidginization）・クリオール化（creolization）が進み、次第に英語の豊かな屈折がなくなっていったとするのが一つの有力な説である（cf. 児馬（2018））。つまり、例えば、言語 A の satabos という語が、言語 B

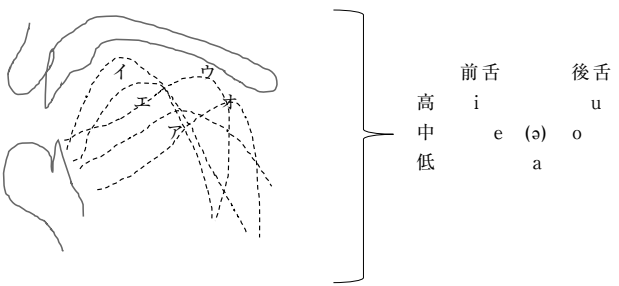
では satabus となるというような場合、語尾の -os と -us を除けば語幹は共通しており、異なる語尾の部分だけを端折っても大体の意味は通じる。そこで、そのように簡略化して使っているうちに、いつしかそれが定着してしまうことを、ピジン化・クリオール化が起こると言う。OE と ON が接触した場合も、そういったことが起こったというわけである。通常、征服者の言語が被征服者に強要されるので、アルフレッド大王がいなくて、ヴァイキングたちがイギリスの島全体を征服していれば、英語は消滅していたかもしれないのだが、幸運にも、生き残ったのである。しかし、屈折が単純化したことで、それを埋め合わせるために、語順の自由さは失われていった。

次に、以下で詳しく取り上げる GVS は、ME の終わりごろから ModE の前半にかけて生じ、英語の母音の発音を大きく変化させた。その結果、同じ単語でも ME と ModE では発音が異なるようになった（具体例はのちほど示す）。また、ModE の中でも特に初期近代英語（Early ModE）と分類される時期に書かれたシェークスピア（William Shakespeare（1564-1616））の作品を読むと、一般動詞が助動詞のように使われていることに気づく。つまり、一般動詞を主語の前に移動させることで疑問文にしたり、一般動詞に not をつけることで否定文にしたりしている。しかし、PE では、もちろん do, does, did を用いる。

1.2. 母音を発するときの舌の位置

GVS について論じる前に、母音を分類・記述するための基本概念に触れておく。母音は、それを発する際に口中で舌がどちら側（前側か後ろ側か）にどのくらい高くなるか――その最高点の位置――によって、前舌母音（front vowel）と後舌母音（back vowel）、並びに、高母音・中母音・低母音（high/mid/low vowel）といった捉え方をする。日本語の5母音を発音する場合の大体の舌の位置（形）を図示すれば以下のようになる。

(3)



もちろん、定規で線を引いたように舌の高さが揃うわけではなく、例えば、「イ」を発するときの舌の最高点に比べると、「ウ」を発するときの舌の最高点はやや低くなる。しかし、そういった細かな違いは捨象して、右側にまとめたように、「イ」と「ウ」は共に高母音、「エ」と「オ」は共に中母音、「ア」は低母音とする。なお、GVS ついて述べる際には、いわゆるあいまい母音（schwa）についても言及するので、/ə/ の位置も示した。全ての母音のちょうど真ん中（前でも後ろでもなく、高くも低くもない位置）にあるのが /ə/ である。

1.3. 補足（音変化の色々、推定の方法など）

母音や子音が変化する要因は様々ある。例えば、man の複数形は、ずっと以前（ゲルマン祖語（Proto-Germanic）の段階で）は語尾に -iz をつけた manniz であったと考えられている。ところが、/a/ と /i/ の融合という母音変異（mutation）が起こり――日本語でも、例えば「ダイコン」→「デーコン」、「ウマイ」→「ウメー」となることを参照――、men ができた。これは、/a/ が後ろにある /i/ に近い音になろうとしたわけで、ウムラウト（umlaut）型変化とも呼ばれる。不規則形ができる場合にもそれなりの理由・過程があるわけである（しかしながら、GVS の場合には、後で述べるように、このように後続の音などの影響で変化が起きたわけではない点が特徴的である）。

また、例えば knight（騎士）は、ME では「クニヒト」のように綴り字通り（子音もちゃんと）発音されていたが、今では k と gh は読まれない。例えば、幼児の発話で「救急車」が「チューチューシャ」となるように、口の奥で調音される子音は、発音しにくい面があり、また、聞き取りにくくもある。山口市の「秋穂」という地名は、文字通り読めば Akiho のはずだが、Aio となることなども示唆的である。よって、英語の音変化（綴りと発音のずれ）だけが特殊なわけでは決してない。

ところで、英語の古音を推定し、その変化を跡付けるにはどのようにするのであろうか。長谷川編著（2014: 22）に古音の推測法や問題点などが分かりやすく述べられているので、引用することにする。

> ……音そのものが記録され残せるようになったのは、レコードなどの機器が発明されて以降、つまりごく最近ということになります。それまでの言語の音は、その陰のような文字と現在の音の音色、組み合わせ、体系などの研究から推測するしかありません。それだけでなく、英語には

もう少しやっかいなことがあります。イギリスはその歴史上、外敵の侵入、内乱、疫病がうち続き、混乱を極めたことが何度もあります。そのため、残された資料の全体量が少なく、次の時代の資料とのつながりも薄いのです。また、古英語の文献は、今は中心から外れたウェセックス方言、すなわちウェスト・サクソン方言で書かれています。1400年ごろになってようやく、今日のロンドン、ケンブリッジ、オックスフォードを結ぶ三角地帯の英語が標準的英語として認識されるに至るのです。

古音の推定法をもう少し具体的に述べると、例えば、詩で押韻すべき位置にある語ならば、たとえ綴りが異なっても、同じ発音をしていたはずである。[2] このように、残された文献を手がかりにすれば、ある程度は推定できる。しかしながら、よく分からないことも多いのである。

以上、本第1節で述べたことを踏まえながら、次節でGVSについて紹介していくことにする。

2．大母音推移

2.1. 概観

GVS――“Great Vowel Shift”と命名したのはデンマークの言語学者イェスペルセン（Otto Jespersen）――は、15世紀初めに始まり、17世紀後半までにほぼ完了した一大母音変化である（今も緩やかに続いていると見なすことが可能かもしれない）。強勢（stress）のある長母音全体が、一段ずつ上昇し（多くが二重母音化し）た現象で、発音と綴り字の乖離を引き起こすことになった。ME末の1476年に、キャクストン／カクストン（Caxton）がウェストミンスターで印刷所を開設したことで、綴り字の固定化が起こった。そのため、綴りと発音のずれが一層進むことにもなった。[3] GVSの大きな特徴は、文脈自由（context-free）、すなわち「前後にどのような音がくるのかは関係がない」変化であったということである。

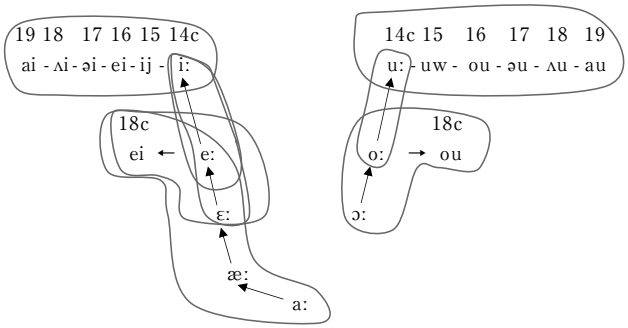
なお、母音が「緊張している（tense）か弛緩している（lax）か」という区別が重要な現代の英語と違って、昔の英語は（日本語と同様に）母音には（そして子音にも）長短の区別があった。ごく大まかに言えば、OEは綴り字通りに単語を読めばよく、MEでは、強勢のある母音は長く発音し、強勢のない母音はあいまい母音 /ə/ で発音された。name（名前）という語で例示すれば、その発音変化は次のようになる。

(4) OE: nama [námɑ] → ME: nāme [ná:mə] → ModE: name [neim][4]
(cf. 石橋ほか編 (1973: 271))

2.2. GVS の全体像と具体例

では、安藤 (2002) などを参照しながら、GVS による全体的な変化の様子とその時期、および具体例を示すと、以下の (5)、(6) のようになる (なお、高母音の /i:/ と /u:/ は、一段上がりようがないので、こぼれ落ちる／あふれるように /ai/, /au/ といった二重母音に変化していった)。

(5)



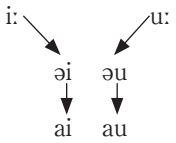
(6) ME　　ModE

a. [i:] līf ⟶ [ai] life (child, divine, find, five, cry なども同様)
b. [u:] hous ⟶ [au] house (about, now, down, ground なども同様)
c. [ɛ:] ēte(n) ⟶ [i:] eat
d. [e:] tēth ⟶ [i:] teeth
(ME の th は「ト」に近い)
e. [ɛ:] grēt ⟶ [ei] great
f. [a:] nāme ⟶ [ei] name
g. [ɔ:] stōn ⟶ [ou] stone
h. [o:] tōth ⟶ [u:] tooth
[o:] gōde ⟶ [u] good ([u:] の短音化)
[o:] blōde ⟶ [ʌ] blood ([u] の非円唇化)

例えば、Lehmann (1973: 151) は、“This change (=GVS) is remarkable, for all the Middle English vowels are modified similarly, by raising; /ī, ū/, however, were already high vowels and could be raised no further. Their

counterparts in Modern English are the diphthongs /ay/ and /aw/.” と述べている。この高母音の二重母音化をどのように図式化するかに関して、大抵の英語史の入門書では（例えば、中尾（1979）、中尾・寺島（1988）、松浪編（1995）、西光編（1997）、橋本（2005））では、母音の図の中心辺り――上記（3）の図で /ə/ を記した部分――に潜り込むような書き方になっている。これは、例えば、/ī/ が /ai/ になる前段階で /əi/ となったので、あいまい母音の存在する方向への変化であったと捉えているものと思われる（この現象は、中舌部編流（center drift）という名称で呼ばれることもある）。[5] つまり、次の（7）のように表されている。

（7）



しかしながら、GVS は母音全体が上昇していく変化なので、たとえて言えば、浴槽に張ったお湯が上へあがっていくと、ついにはあふれて縁からこぼれるように、外側に向かう方が、自然な移動の姿だと思われる。そこで、本稿では、どちらかと言えば、高母音の二重母音化を外側へこぼれるような変化として捉える少数派（例えば渡部（1983）、Lass（2006）など）の図式を採用している。ただし、何世紀に起きた変化かを示しやすいように、（下方向にではなく）、水平方向に広がる／並べる書き方を（5）ではした。

さらに、松浪編（1995）などを参照しながら、注意すべきことなどを個別に、実例を挙げながら、以下に補足的に列挙していくことにする。

（8）a. e: → i:

ME 15-16c

例：see, feet, deep, street, grief など、現代英語で ee の綴りを [i:] と発音するものなどが該当。

※（ラテン語の文字を採用した英語において、）いわゆる「ローマ字読み」が通用しなくなった（例えば、日本人が「ペース」をローマ字表記すると “peesu” と書くことなどを参照されたい）。

b. o: → u:

ME 16c

例：moon, cool, move, do, to など、現代英語で oo の綴りを [u:] と発音するものなどが該当。⇒ これもローマ字読みが通用しなくなった例。

c. ɛ: → e:

ME　16-17c

例：sea

N.B. 現代英語では sea [si:] であり、これは17世紀後半の [se:] が、（音変化したためではなく、）東部方言の [i:] を借りてきたためである。この（8c）の変化を受けた大部分の語が1700年頃 [i:] に置換された（今日、ea の綴りで [i:] と読まれる speak, meat, dream などが該当）。

d. a: → æ: → ɛ: → e: → ei

ME　15c　16c　17c　18c

例：name, take, shame, fame, table などが該当。

N.B. なお、上記の（8c）を受けた一部の語（great, steak, break など）が1700年頃に [e:] となった段階でこの変化に合流して、最終的に [ei] となったことに注意されたい。すなわち、現代英語で ea の綴りで [ei] と読む語が、この変化に途中から合流したのである。

e. ɔ: → o: → ou

ME　16c　18c

例：stone, home, oath, old, note など、現代英語で oa の綴りで [ou] と読む語などが該当。

また、参考までに、中英語における長母音を含む語の発音が、近代英語になってどのように変化したのかを確認するために、チョーサー（Geoffrey Chaucer（1343-1400））とシェークスピアの当時の発音対照表を示すことにする（松浪編（1995: 102）から引用）。

(9)

	Chaucer	Shakespeare
name	[na:mə]	[nɛ:m]
meat	[mɛ:t]	[me:t]
feet	[fe:t]	[fi:t]
find	[fi:nd]	[fəind]
boat	[bɔ:t]	[bo:t]
food	[fo:d]	[fu:d]

now　[nu:]　　[nəu]

なお、石橋ほか編（1973: 271）には、「今日のアメリカ英語に、[ne:m], [sto:n] のような初期近代英語のものに類似した音が聞かれることがあるが、それらは二重母音化から取り残された現象ということになる」という興味深い指摘がある。アメリカ英語の発音の方が、イギリス英語よりも、古い形を留めている場合が散見されるが、二重母音化されていない例も、そういった古い発音が残った例というわけである。

ところで、例えば、沖縄方言では「エ」が「イ」、「オ」が「ウ」に変化する（例：三線（サンセン→サンシン）、御嶽（オンタケ→ウタキ））。つまり、5母音体系が3母音体系に簡素化される傾向がある。これらも、e → i、o → u という具合に中母音が高母音に一段上がる現象だから、GVS との共通性があるようにも見える。しかしながら、沖縄方言の母音の変化は、あくまで中母音に起こる部分的な変化であり、低母音や高母音に起こるわけではない。一方、GVS は、母音全体に起こった変化であるので、やはり、規模と性質が大きく異なる。

3．GVS はなぜ起こったのか？

例えば、生成音韻論の金字塔である Chomsky & Halle（1968）（=SPE）では、GVS に関する厳密な規則の定式化を、現代英語の中で見られる母音の変化（例えば、divine → divinity）との関連性も考慮しながら、行っている。これにより、我々は、GVS がどのように（how）起こったのかを知ることはできる。しかしながら、GVS はそもそもなぜ（why）起こったのかという疑問には、答えてくれてはいない。

理論には依らず、素朴に推察するのであれば、例えば、「科学が徐々に発達し、社会がだんだん複雑化していくと、人々が気ぜわしくなり、喋り方も次第に速くなっていくはずである。すると、口を広めに開けてゆったりと長母音を発していたところが、やや口を狭めて、緊張した母音を短めに発するように変わったとしても、おかしくあるまい」というような考え方ができるかもしれない。しかし、もしそうであれば、他の言語でも同じような母音の変化が起こらなくてはならないはずである。が、そうはなっていないので、やはり、社会の変化と関係付けるような論じ方は避けた方が無難である。

GVS がなぜ起こったのかについて、はっきりとした理由は分かっていないが、一応、GVS に関する有名な説としては二通りある。一つは、ウィー

ン大学のルイック（Karl Luick）が唱えた、低い母音が上の母音を一段ずつ押し上げていったとする押し上げ説（push-theory）（押し上げ連鎖説（push-chain theory）とも呼ばれる）で、もう一つは、コペンハーゲン大学のイェスペルセンが唱えた、高母音が二重母音になって、その空き間に下の母音が引き上げられたとする引き上げ説（pull-theory）（引き上げ連鎖説（pull-chain theory）とも呼ばれる）である。他に、ベルリン大学のホルン（Wilhelm Horn）の「人は興奮するとのど仏が高くなる。その場合、母音も高くなる。そして、その高い音が定着していった」というような説もある（cf. 渡部（1983: 228-229））。しかし、いずれの説がもっとも妥当であるかを決定するような有力な論拠は、筆者の知る限り、まだ示されていない。[6]

本節の最後に、GVS が起こった理由について、私見（あくまで単なる推測である）を述べておく。OE の母音体系は、以下に示したように、長母音と短母音のペアが綺麗に揃ったものであった（二重母音は省略した）（cf. 窪薗・太田（1998: 118-119））。

(10)　i: i　　y: y　　u: u
　　e: e　　　　o: o
　　æ:æ　　　　ɑ: ɑ

しかしながら、1066年のノルマン・コンクェスト（Norman Conquest）以降、おびただしい数の古フランス語（Old French）の語彙が英語に取り込まれていった。また、いわゆる文芸復興（Renaissance）の時期には、たくさんのギリシャ語やラテン語が借用され、新語が作られていった。そのため、おそらく、ME の中期から ModE の初期にかけては、かなり外国語なまりのような発音（母音）も増えたのではなかろうか。さらに、ロンドンなどの都会では、地方出身者の異なる方言同士が激しく交わっていたはずである。そして、長母音と短母音の違いは、単に発話時間が長いか短いかという音量の違いだけでなく、長母音は緊張し、短母音は緩む、という音質の違いが徐々に生じ始めたのではないかと思われる。つまり、以下のように、ペアであったはずの母音の口中での調音位置（高さ）にずれが生じていった――すなわち、現代英語の母音体系に近づいていった――と仮定しよう（4種の高母音と中母音だけを示した）。

(11)　i:　　u:
　　i　　u
　　e:　　o:
　　e　　o

すると、ペアの片方の音が存在した位置が空白となり、いわば隙間のある母音体系となる。そこで、その空き間を埋めるために（あるいは、新たな相棒を求めて）、母音を「上昇」させ、バランスを取ろうとする力・動機が働くはずである。[7] そして、そうした動き（上昇変化）が、一箇所だけでなく、連鎖的に、母音全体に広がっていったのではなかろうか。

4．むすび

本稿では、英語の綴り字と発音の乖離――例えば、make を「マケ」と発音しないなど――の最大の原因になった GVS について概観してきた。綴りと発音のずれの理由が、一部でもお分かりいただけたら幸いである。英語は、子音は比較的安定しているが、母音は変化しやすく、地域や階級などによっても違った音色を持つ。そして、GVS は過去に起きた現象とされても、発音の変化の現象は収まったわけではなく、現在もじわりと続いているのである。

注

＊本稿は、英語音声指導協会（エイテップ）（The *A*ssociation for *T*eaching *E*nglish *P*ronunciation, ATEP）の「冬のワークショップ」（於：山口県健康づくりセンター、2018年1月7日）において、「make を『マケ』と読まないのはなぜ？」といった問いに答える、といった趣旨で講演した際の資料を基にしている。よって、学会発表をした場合とは違って、一般市民の皆さんにも分かりやすいように、ごく基本的なことから説き起こした内容になっていることをお断りしておく。

1．研究者によっては、例えば、古英語の期間を450-1150年、中英語の期間を1150-1475年としたりするが、本稿では、覚えやすい400年ずつに分ける区分法を採用した。

2．古音の推定法に関しては、中尾（1979: 90-95）に具体的で分かりやすい解説がある。

3．英語は「綴りと発音がずれている」と言われることが多いが、日本語でも、結構ずれているものがある。例えば、助詞の「は」はいわゆるハ行転呼によって /wa/ となっているし、「すみません」は /suimasɛn/ と言われる（そして、「すいません」と普通に書かれるようにもなってきた）。
4．「語末の e は黙字で、直前の母音を長くする（アルファベット読みにする）」といった述べ方がよくされる。
5．こうした中心部分へと下るという捉え方がごく一般的であることを強調するために、あえて和書の教科書的な文献を挙げたが、もちろん洋書であっても（例えば、Smith（2007））、また、研究書・研究論文であっても（例えば、Ogura（1987）, 藤原（2016））、同様の捉え方が示されている。
6．GVS の起こったメカニズム・理由を理論的に探求した論考としては、個人的には、山根（1991）がもっとも興味深い。彼女は、SPE 理論と Schane（1984）などの素粒子音韻論（Particle Phonology）を組み合わせて、GVS のメカニズムを解明している。
7．比喩的に述べると、結婚してしっくりいっている間は新たなパートナーを求めないが、離婚したりすると、新しい相手を探すようなことと似ていたのかもしれない。

参照文献

安藤貞雄（2002）『英語史入門：現代英文法のルーツを探る』開拓社.
Chomsky, Noam & Morris Halle（1968）*The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
藤原保明（2016）「大母音推移再考：目的論的アプローチ」聖徳大学大学院言語文化学会（編）『言語文化研究』15: 13-22.
長谷川瑞穂編著（2014）『はじめての英語学　改訂版』研究社.
橋本功（2005）『英語史入門』慶應義塾大学出版会.
石橋幸太郎ほか編（1973）『現代英語学辞典』成美堂.
児馬修（2018）『ファンダメンタル英語史　改訂版』ひつじ書房.
窪薗晴夫・太田聡（1998）『音韻構造とアクセント』研究社.
Lass, Roger（2006）Phonology and morphology. In R. Hogg & D. Denison（eds.）, *A History of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press, 43-108.

Lehmann, Winfred P. (1973) *Historical Linguistics: An Introduction*, 2nd ed. New York: Holt, Rinehart & Winston.
松浪有編（1995）『英語の歴史』大修館書店.
中尾俊夫（1979）『英語発達史』篠崎書林.
中尾俊夫・寺島迪子（1988）『図説英語史入門』大修館書店.
西光義弘編（1997）『日英語対照による英語学概論』くろしお出版.
Ogura, Mieko (1987) *Historical English Phonology: A Lexical Perspective*. Tokyo: Kenkyusha.
Schane, Sanford A. (1984) The fundamentals of particle phonology. *Phonology Yearbook* 1: 129-155.
Smith, Jeremy J. (2007) *Sound Change and the History of English*. Oxford: Oxford University Press.
渡部昇一（1983）『英語の歴史』大修館書店.
山根典子（1991）「大母音推移のメカニズム」近代英語協会（編）『近代英語研究』8: 1-18.